

# 援



# 年内入試支

## ——引き出し、共に創る「マイ・ストーリー」

弊誌は、創刊400号を迎えた前号において、これからの高校教育のあり方について考える記念特集を組みました。同特集ではバックカスティングの視点で、望まれるこれからの社会像を考えた上で、そうした社会の創り手を育むために必要な、高校教育が今後取り組むべき課題を、「学び続ける人材の育成」「地域・家庭とともに生徒を育てる」「教師が生き生きと働き続けられる環境づくり」の3つに焦点化しました。

今号以降はフォアカスティングの視点で、それら3つの課題につながる、今まさに現場の先生方が直面しているテーマの連載コーナーがスタートします。例えば、「学び続ける人材の育成」につながるものとして、探究学習（「探究学習 伴走する教師たち」）や学習評価（「そうだったのか！ 学習評価」）をテーマとしたコーナーの連載を始めます。3つめの働き方改革につながるものとしては、働き方改革の実践を追うコーナー（「追跡！ 働き方改革」）が該当します。

特集も現場の今課題をテーマとして取り上げてまいります。今号は、一般選抜を上回るまでその募集枠が拡大している「年内入試」(\*)における生徒支援のあり方について考える特集を組みました。「マイ・ストーリー」「引き出す」「共に創る」をキーワードに、ぜひご覧ください。

VIEWnext 編集部 統括責任者 柏木 崇

※総合型選抜（旧AO入試）と学校推薦型選抜を指す。9～12月の年内に試験が実施され、合否が決まること多い両選抜を、ここでは「年内入試」と総称する。

### P.4 課題整理

#### 生徒の内面を引き出す問いかけで、「マイ・ストーリー」の構築を支援

東京都・私立トキワ松学園中学校高校 進路指導部長 加藤美恵子

広島県・私立広島桜が丘高校 1学年主任 沖村将彦

熊本県立宇土中学校・宇土高校 探究部長、進路指導主事 後藤裕市

ベネッセコーポレーション 高大接続部 部長 富田泰成

ベネッセコーポレーション 教育情報センター センター長 谷本祐一郎

### P.10 実践事例

#### P.10 実践事例1 ●東京都・私立トキワ松学園中学校高校

1年次から学校設定科目や対話で関心を掘り起こし、表現力も育む

#### P.13 実践事例2 ●広島県・私立広島桜が丘高校

「桜が丘6マインド」を軸に、生徒のよさや成長を教師が語る

#### P.16 実践事例3 ●熊本県立宇土中学校・宇土高校

探究の学びを軸に、UTO-LOGICを駆使して「問い」を創る力を養う

### P.19 自己理解を促すかわり方を考える

教師の共感的なかわりの中で、生徒は自身の思いを再構築する

富山大学保健管理センター 客員准教授 西村優紀美

# 生徒の内面を引き出す問いかけで、「マイ・ストーリー」の構築を支援

総合型選抜と学校推薦型選抜（以下、年内入試[\*1]）の募集枠の拡大に伴い、同選抜による大学入学者数が増加している。教科指導に加え、年内入試で重視される志望理由書の作成や面接などに臨む生徒に対する支援が教師に求められる中で、学校、そして教師は、どのような課題に直面しているのだろうか。P.10以降の実践事例に登場する3校の教師が語り合った。

熊本県立宇土中学校・宇土高校  
探究部長、進路指導主事  
**後藤裕市**  
プロフィールは P.16

広島県・私立広島桜が丘高校  
1学年主任  
**沖村将彦**  
プロフィールは P.13

東京都・私立トキワ松学園中学校高校  
進路指導部長  
**加藤美恵子**  
プロフィールは P.10



ベネッセコーポレーション  
教育情報センター センター長  
**谷本祐一郎**  
全国の高校教師向けのセミナーの企画、大学入試や教育動向の分析を統括



ベネッセコーポレーション  
高大接続部 部長  
**富田泰成**  
高校生と卒業後の進路先の接続を深めるためのサービス・教材の開発を統括

## 「マイ・ストーリー」とは……

生徒一人ひとりの「自分のこれまでの学びや活動、その成果や結果に至るまでのプロセス、これからの展望」を指す

「マイ・ストーリー」を描き、それを語る力が、これからの大学入試で希望進路を実現するために必要とされることを検証し、そうした力を生徒に育む教師の指導や支援のあり方・方法を、実践事例を通じてお伝えしたVIEWnext高校版 2021年8月号・特集はこちら▶



**谷本** まず、ここ数年の年内入試の状況を整理します。年内入試による大学入学者の割合は、2021年度入学生で5割に達し、22年度入学生では一般選抜による入学者の割合を上回りました(図1)。国公立大学でも年内入試の募集枠は拡大しており(図2)、今後もその傾向が続くと考えられます。

**加藤** 年内入試の拡大は、本校の受験状況からも実感しています。7年前に私が3年生の担任を務めた時、クラスの3分の2の生徒は一般選抜の受験者でした。それが一転して、昨年度担任を務めた3年生のクラスでは、3分の2の生徒が年内入試を受験しました。

**谷本** それは大きな変化ですね。大学へのアンケート調査の結果を見ると、年内入試の選抜で最も重視するのは

近年の入試環境  
の変化における  
注目点は？

拡大を続ける年内入試では  
「マイ・ストーリー」が鍵に

\* 1 総合型選抜(旧AO入試)と学校推薦型選抜を指す。9~12月の年内に試験が実施され、合否が決まること多い両選抜を、ここでは「年内入試」と総称する。

# 年内入試支援

— 引き出し、共に創る「マイ・ストーリー」 —

## 図2 国公立大学で年内入試の募集枠が拡大

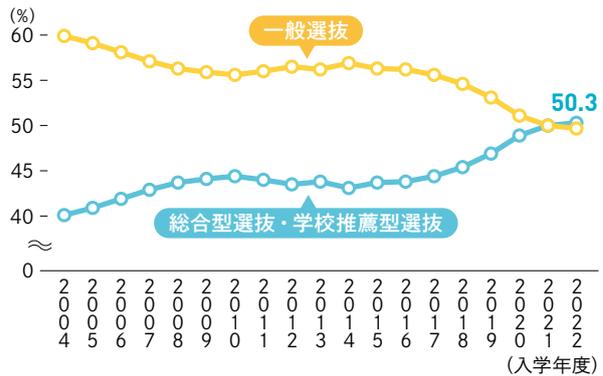
### 2024年度入試 国公立大学の募集枠の変更点

会津大学	コンピュータ理工学部で学校推薦型選抜30人増(前期日程30人減)
宇都宮大学	工学部基礎工学科で総合型選抜を新規実施(定員10人)、学校推薦型選抜5人増(前期日程15人減)
埼玉県立大学	保健医療福祉学部で学校推薦型選抜27人増(後期日程40人を廃止、前期日程13人増)
東京工業大学	総合型選抜48人増、学校推薦型選抜30人増(前期日程78人減)。総合型選抜では、一般枠118人、女子枠58人
大阪大学	医学部保健学科で学校推薦型選抜4人増(前期日程4人減)
広島大学	総合科学部で総合型選抜6人増(前期日程6人減)
鹿児島大学	農学部で学校推薦型選抜36人増(前期日程36人減)

※ベネッセコーポレーション調べ。最新の情報は、大学のウェブサイト等でご確認ください。

## 図1 年内入試による入学者が5割超に

### 総合型選抜・学校推薦型選抜の入学者の割合の推移



注1) 2021年度以降は「その他の選抜」の区分が新設されたため、20年度以前に学校推薦型選抜に含まれていた一部の選抜が別集計となった。  
 注2) 値は「一般選抜、総合型選抜及び学校推薦型選抜の入学者の合計」に対する各選抜の入学者の割合。  
 ※文部科学省「国公立大学入学者選抜実施状況」を基にベネッセ教育情報センターが作成。

## 図3 年内入試で重視されるのは、「明確な志望動機」

### 総合型選抜・学校推薦型選抜で重視すること

重視すること	総合型選抜 (%)	学校推薦型選抜 (%)
明確な志望動機 (大学・学部・学科で学びたい理由)	89	79
基礎学力	28	62
思考力、判断力、表現力などの資質・能力	55	54
コミュニケーション能力	63	53
何事にも前向きに取り組む姿勢	61	50
卒業後の展望 (社会に出た後にやりたいことやその理由)	55	43
自らの興味・関心に応じて行動できる力	47	39
協調性	45	38
社会の諸課題に対する関心や課題意識	33	28
興味・関心のある分野についての専門的な知識	27	21
リーダーシップ	28	20
各種大会や資格、探究活動などの目標を達成するためのプロセス	28	18
各種大会での受賞歴、各種資格の取得状況、探究活動の実績	24	17

※ベネッセコーポレーション「2021年度 学校推薦型選抜・総合型選抜に関する大学アンケート調査結果」を基に編集部で作成。

「明確な志望動機」で、思考力・判断力・表現力等の資質・能力のほか、「マイ・ストーリー」に不可欠な「卒業後の展望」も重視されています(図3)。

**沖村** 年内入試の対応としては、探究学習などを通じて生徒に資質・能力を育むとともに、生徒自身の学びの経験に基づいた志望動機や将来像を、生徒が他者に伝えられるようにすることが求められると思います。

**谷本** その通りだと思います。先生方と年内入試についてお話をすると、「本校では年内入試で評価されるような探究学習はできていないし、華々しい実績があるわけでもない」とよく言われますが、大学はそのような実績だけを評価するわけではないようです。ある大学の入試担当者は、どのような経験から何を学び、何ができるようになったか、そして、それを将来にどうつなげていくのかを明確化し、語れることを、年内入試において重視していると話していました(本誌22年10月号特集を参照「\*2」)。まさに図3の調査結果が示している通りです。

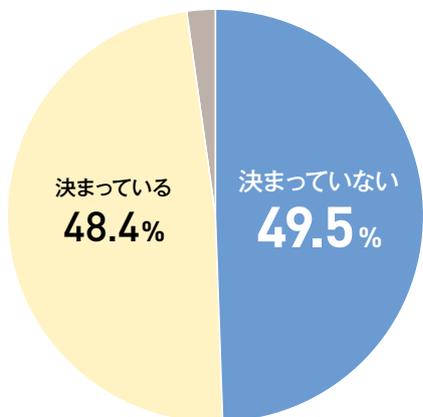
**後藤** 年内入試で合格した本校の生徒の志望動機を見て、学校内外での学びを通じて育んだ資質・能力と、大学入学後までを視野に入れた展望を、自分の言葉で表現できていました。

\*2 2022年度10月号の特集「高大接続の視点で見通す2025年度大学入試」では、多面的・総合的評価を推進する4大学が、2025年度入試に関する方針や、その背景にある大学が求める人材像、大学の学びを通じて育成する資質・能力などについて語った。ウェブサイト『VIEW next ONLINE』の「高校版バックナンバー」(https://view-next.benesse.jp/view/cat/bkn-hs/)、または右の2次元コードからアクセスしてご覧ください。



図5 2年生で指定校型を希望しても、約5割が志望校“未定”

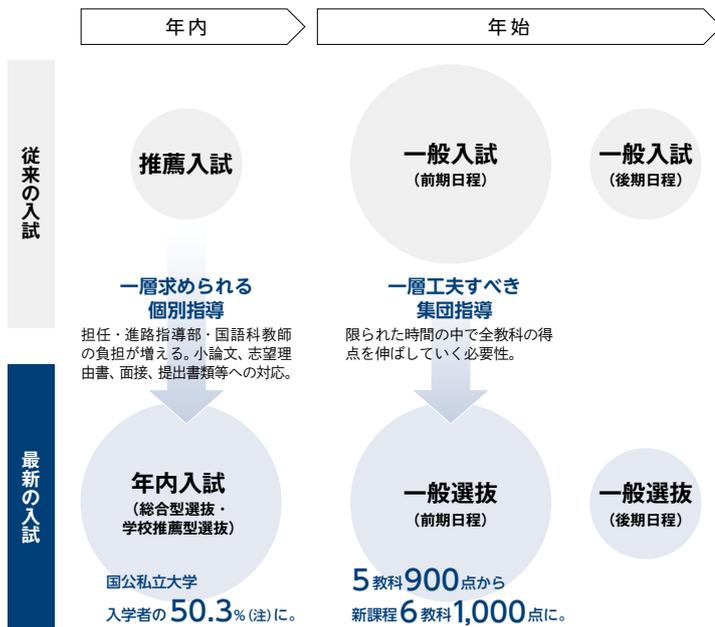
指定校型の学校推薦型選抜を希望する生徒の志望校決定状況



※スタディーサポート 2021年度2年生2回の結果。

図4 年内入試の支援が拡大する分、指導の負担も増加

入試指導のボリュームのイメージ



注) 値は「一般選抜、総合型選抜及び学校推薦型選抜の入学者の合計」に対する各選抜の入学者の割合。

※文部科学省「国公立大学入学選抜実施状況」を基にベネッセ教育情報センターが作図。

**谷本** 生徒の進路意識の面でも、学校全体での支援体制が必要ですね。

**沖村** 私は担当教科の地理歴史科に関する分野への進学を希望する生徒の支援はできますが、それ以外は支援が難しい場合もあります。そうした点でも、

準備も必要となるでしょう。

「マイ・ストーリー」は生徒一人ひとりで異なるため、個別支援が必要となります(図4)。担任などの特定の教師に負担が偏らないような体制の整備も必要となるでしょう。

「マイ・ストーリー」は生徒一人ひとりで異なるため、個別支援が必要となります(図4)。担任などの特定の教師に負担が偏らないような体制の整備も必要となるでしょう。

進路指導体制の見直しを。担任に負担が偏るケースも



谷本 生徒の進路意識の面でも、学校全体での支援体制が必要ですね。

沖村 私は担当教科の地理歴史科に関する分野への進学を希望する生徒の支援はできますが、それ以外は支援が難しい場合もあります。そうした点でも、

準備も必要となるでしょう。

「マイ・ストーリー」は生徒一人ひとりで異なるため、個別支援が必要となります(図4)。担任などの特定の教師に負担が偏らないような体制の整備も必要となるでしょう。

「マイ・ストーリー」は生徒一人ひとりで異なるため、個別支援が必要となります(図4)。担任などの特定の教師に負担が偏らないような体制の整備も必要となるでしょう。

るデータがあります。指定校型の学校推薦型選抜を希望する2年生の約5割が、志望校が未定でした(図5)。

沖村 年内入試では「マイ・ストーリー」を語ることが求められることを早期に生徒に伝え、安易な進路選択をさせないようにしています。生徒によって目指す方向性や自己理解の解像度は異なりますから、支援の方法も1つではありません。私は生徒一人ひとりと対話をしながら、一緒に生徒の志向や将来像を掘り下げています。

加藤 私も同じです。生徒が「マイ・ストーリー」を語れるようになるまでには時間がかかりますが、生徒が自分の学びの経験と未来をつなげるためには必要なプロセスです。生徒との対話を通じて、「マイ・ストーリー」をつくり上げることが大切です。

後藤 本校の探究学習では、生徒が自分の関心のあるテーマについて、様々な学問や文献からアプローチして考察を深めていくようにするとともに、その探究が自分のキャリアにどうつながるのかも考えるよう、生徒に伝えています。そうした活動を通して志向と将来がつながり、「マイ・ストーリー」を構築することができれば、生徒は自分のやりたいことにこだわりを持てるようになるのだと思います。

図7 教師に求められる「引き出す」力

■ これからの指導に求められる教師の姿勢



入試の多様化による課題は、情報を「教える・伝える」ことだけではなく、生徒の希望進路や自主性を「引き出す」こと。



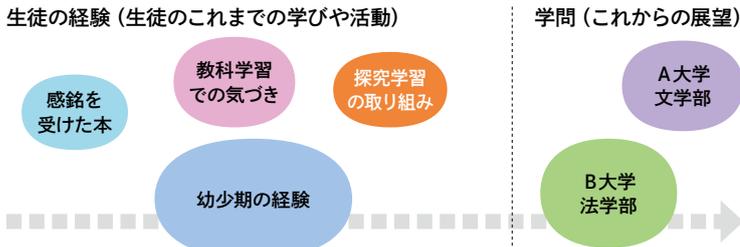
富田 生徒の「マイ・ストーリー」づくりをどう支援すればよいのかを考えるために、「マイ・ストーリー」の状態を図式化しました(図6)。例えば、幼少期の経験を起点に語られた志望動機が、その経験と志望校のつながりが不明瞭であるがために、説得力に欠ける場合があります。それは、幼少期の経験の中で印象に残っていることを断片的に回想して、志望学問に後づけされているような志望動機です。一方、「マイ・ストーリー」を説得力を持って語れる生徒は、自身の関心や興味といった自分の軸をベースにして、それまでの学びや活動とを結びつけて志望動機を語れていると考えます。

後藤 本校では生徒に、探究学習と自分のキャリアを結びつける視点を意識させています。そのためにまず、マイ

谷本 入試の多様化による進路指導上の課題は、生徒に情報を「教える・伝える」ことではないかと弊社では想定していました。しかし、それ以上に、生徒の希望進路や自主性を「引き出す」ことに腐心しているという声が多く寄せられていました(図7)。

図6 自分の軸に基づき、経験や志向を整理する

■ 「マイ・ストーリー」になっていない状態(例)



幼少期の経験から法学部を志望し、志望動機も幼少期の経験を踏まえて語っていたが、その経験と志望校のつながりが薄く、説得力に欠けている。

■ 「マイ・ストーリー」になっている状態(例)



内面を掘り下げると、自分の関心や強みといった軸が明確に。そして、その軸を基に自分の経験や志向を整理すると、感銘を受けた本や教科学習での気づき、探究学習の取り組みが結びつき、大学で学びたい学問は文学部にあると判明。それらを踏まえると、説得力を持って志望動機を語れるように。

「マイ・ストーリー」が語れる状態とは?

自分の軸を持って、経験や志向の関係性を整理

富田 生徒の「マイ・ストーリー」づくりをどう支援すればよいのかを考えるために、「マイ・ストーリー」の状態を図式化しました(図6)。例えば、幼少期の経験を起点に語られた志望動機が、その経験と志望校のつながりが不明瞭であるがために、説得力に欠ける場合があります。それは、幼少期の経験の中で印象に残っていることを断片的に回想して、志望学問に後づけされているような志望動機です。一方、「マイ・ストーリー」を説得力を持って語れる生徒は、自身の関心や興味といった自分の軸をベースにして、それまでの学びや活動とを結びつけて志望動機を語れていると考えます。

沖村 生徒が「マイ・ストーリー」を語れるようにするためには、教師が問いかけて、生徒が持っているものを引き出すことが一層大事になりますね。これからの教師には、「ティーチング」以上に「ファシリテーション」の力が求められ、生徒と一緒に探究していく姿勢が必要だと、強く感じています。

加藤 本校の生徒も同じような状況です。そこで、自分の内面を掘り下げるための方法を教えています。例えば、1つのキーワードを挙げて、「〇〇とは何か」「なぜ〇〇なのか」などの6種類の問いを立て、答えるという方法です。自分についての問いを立て、その答えを考えることを通じて自分の内面を深め、自分の軸を見いだしていきます。

沖村 生徒が「マイ・ストーリー」を語れるようにするためには、教師が問いかけて、生徒が持っているものを引き出すことが一層大事になりますね。これからの教師には、「ティーチング」以上に「ファシリテーション」の力が求められ、生徒と一緒に探究していく姿勢が必要だと、強く感じています。

谷本 入試の多様化による進路指導上の課題は、生徒に情報を「教える・伝える」ことではないかと弊社では想定していました。しかし、それ以上に、生徒の希望進路や自主性を「引き出す」ことに腐心しているという声が多く寄せられていました(図7)。

## 学校・生徒の状況によって異なる教師の役割

### ■ 希望進路タイプ別 生徒の課題と目指す姿、教師の役割

<p><b>1</b></p> <p>国公立大学を 一般選抜・ 年内入試で 目指す生徒が多い 学校のケース</p>	<p><b>生徒 BEFORE</b></p>  <p>一般選抜と年内入試の両にら みの状況に対し、安易に志望 を下げてしまう姿勢から</p>	<p><b>学校現場で よく聞くお声</b></p> <p>●志望校へのこだわりがなく、教師・保護者の 認める大学へという志向は強い。</p>	<p><b>生徒 AFTER</b></p>  <p>希望する進路実現のために 学びに向かう姿勢に。</p>
<p>教師の役割は <b>入試形式に左右されない志望動機づくり。年内入試は手段の1つ</b></p>			
<p><b>2</b></p> <p>国公立大学を 年内入試で目指す 生徒が多い 学校のケース</p>	<p><b>生徒 BEFORE</b></p>  <p>拡大した年内入試に対して安 易な進路選択を行う姿勢から</p>	<p><b>学校現場で よく聞くお声</b></p> <p>●進路選択についての問いかけを工夫しても、 生徒の反応が薄い。大学選択は「行きたい」よ り「入れる」。指定校や総合型での選択となる。</p>	<p><b>生徒 AFTER</b></p>  <p>自分が生かせる志望先を探索・研究し、こだわりを持った 進路選択ができる状態に。</p>
<p>教師の役割は <b>「こだわり進路」の醸成で、進学後の後悔の回避を</b></p>			
<p><b>3</b></p> <p>大学・専門学校・ 就職など、 生徒の希望進路が 多様な学校のケース</p>	<p><b>生徒 BEFORE</b></p>  <p>これまでの経験によって自己 肯定感が低い状態から</p>	<p><b>学校現場で よく聞くお声</b></p> <p>●生徒の基礎学力と自己肯定感を高めたい。「や ればできる」を実感させたい。</p>	<p><b>生徒 AFTER</b></p>  <p>自分自身の可能性に気づき、 進路・学習に前向きになれる 状態に。</p>
<p>教師の役割は <b>積極評価で、生徒の自己肯定感を高め続ける</b></p>			



### 生徒の見えない部分を 引き出し、今後を考えさせる

**富田** 自校にどのタイプの進路選択をする生徒が多いのかによって、学校の課題は異なり、教師の役割も変わると想定されます(図8)。先生方は、どのような役割を特に意識されていますか。

**沖村** 図8の③に近い本校では、希望進路に向かう意欲を高めるため、まずは生徒に自信を持たせようと考えました。そこで、育成を目指す6つの非認知能力を設定し、その到達度を可視化して、褒めて伸ばす指導に力を入れています。教科学力とは異なる観点で多面的に評価することで、生徒に自分の可能性に気づき、進路に前向きになっ

てほしいと思っています。

**後藤** 図8の①に近い本校では、生徒本人が気づいていない視点に気づかせたり、視野を広げられるように働きかけたりして、自分のこだわりを引き出すことに努めています。例えば、本校が10分間の午睡の時間を設けていることを受けて、睡眠をテーマに自分の関心を掘り下げる活動を行いました。大学で睡眠を研究したいといった生徒もいれば、健康に関心を持って看護系学部を志望した生徒がいたり、睡眠の分析からデータサイエンスに関心を持った生徒がいたり、生徒たちの関心は1つのテーマから様々に広がっていきま

**加藤** 生徒一人ひとりが持つ潜在的な関心や疑問を顕在化させて、取り組みたいことを考えさせることは、生徒をずっと見取っている教師だからこそ果たせる役割ではないでしょうか。本校の有志の生徒で海岸の清掃活動をした際、ある生徒が風力発電の騒音に疑問を持ち、魚と振動の関係を研究しました。別の生徒は、海岸で拾った海藻を使って光合成について調べ、また別の生徒は、捨てられている衣類を問題視し、自然に還る繊維の開発に挑みました。いずれも清掃活動中に出てきた生徒のちょっとした発言を拾い、生徒とやり取りをしながら疑問を引き出したことが、探究に結びつきました。

## 生徒の「マイ・ストーリー」づくりを支援する3校の実践を、次ページから詳しく紹介

### 熊本県立 宇土中学校・宇土高校

詳しくは、P.16～18

**実践1** 全教科で「問い」を起点とした授業を行い、生徒が自ら問いを立てる力を育む。

**実践2** 探究学習で行うプレゼンテーションなどの活動を、年内入試の対策と結びつけて実施する。

**設立** 1920（大正9）年

**形態** 全日制／普通科／共学

**生徒数** 1学年約240人（高校）

**2022年度卒業生進路実績** 国公立大は、名古屋大、岡山大、九州工業大、九州大、熊本大などに54人が合格。私立大は、東京理科大、同志社大、立命館大などに延べ304人が合格。海外大学は、台湾・静宜大などに2人が合格。

### 広島県・私立 広島桜が丘高校

詳しくは、P.13～15

**実践1** 「自考自創」のための6つのマインドを設定。各教科の単元末にそれらを自己評価し、自己肯定感を高める場を設ける。

**実践2** 6つのマインドを発揮した生徒について記入するシートを運用。各教師が入力して共有し、生徒を褒める。

**設立** 1963（昭和38）年

**形態** 全日制／普通科／共学

**生徒数** 1学年約240人

**2022年度卒業生進路実績** 4年制大は、京都産業大、関西大、神戸親和、広島経済大、広島工業大、広島国際大、広島修道大、安田女子大などに延べ39人が合格。短大・専門学校進学75人。就職66人。

### 東京都・私立 トキワ松学園中学校高校

詳しくは、P.10～12

**実践1** 高校1年次に学校設定科目「思考と表現」で、論理的思考力・表現力を育成し、生徒が自分の関心を見いだす活動を行う。

**実践2** 担任を中心に、教師と生徒が対話を丁寧に繰り返し、生徒が自分の関心や活動を進路につなげられるように後押しする。

**設立** 1916（大正5）年

**形態** 全日制／普通科／女子校

**生徒数** 1学年約130人

**2022年度卒業生進路実績** 4年制大は、青山学院大、学習院大、慶應義塾大、多摩美術大、中央大、東京造形大、日本女子大、法政大、武蔵野美術大、明治大、立教大などに延べ137人が合格。短大・専門学校進学9人。

## 振り返ることで経験に 意味を見いだし、軸が定まる

**谷本** 先生方のお話から、「マイ・ストーリー」づくりの支援として、教師が生徒の内面から関心やこだわり感などを「引き出す」ことの重要性を感じました。

**加藤** 教師がすべきこととして、私は「結ぶ」ことも大切にしています。生徒同士の探究、企業や大学など、生徒を他者や社会と結ぶことで、それまでにはなかった視点を得て自分の世界を広げ、「マイ・ストーリー」づくりにつながるからです。自然に還る繊維の開発に取り組んだ生徒は実験を重ね、稲わらを用いて繊維をつくりました。次の段階の実用化には企業が必要だと助言すると、自らアパレル企業60社以上に連絡し、その結果、ある企業から資金提供を受け、実用化に向けた研究ができました。生徒はその経験を基に、大学では循環型地捨地消システム構築について研究したいと「マイ・ストーリー」を語り、第1志望校に総合型選抜で合格しました。

**後藤** 挑戦し、それを振り返って価値づけすることを繰り返すうちに、経験に意味を見いだして、自分の軸が定まってくるのではないのでしょうか。本

校の生徒も、1年次は自分の志向や関心が曖昧ですが、探究学習などで自分で問いを立て、追究し、その成果を発表して他者から評価を受け、改善するといったサイクルを繰り返すうちに、どのテーマでもマインドマップが書ける、つまり自分の軸を持ちます。

**富田** 進路を自分の意志で選択するための弊社の「進路達成プログラム」（\*3）に取り組む生徒の様子を見ても、生徒はまず、自分の軸を基にした志望動機が語れないという壁にぶつかります。その状態から、適性診断や他者の視点を通じて自己理解を深めるトレーニングなどを行い、大学などについての多くの情報を得てから志望動機を表現してみることで、生徒は徐々に「マイ・ストーリー」を語れるようになります。

**沖村** 皆さんのお話から、アウトプットの大切さが分かります。私は担当する歴史の授業で、歴史的事象を知らない人に説明するプリントを作成する。パフォーマンス課題を出しています。多くの生徒が楽しく、前向きに課題に取り組む姿を見て、問いの工夫次第で自分の可能性に気づかせ、進路や学習に前向きにさせることができると感じています。そして、そうして身につけた自分で学ぶ力が、自分の人生を創造することにつながるのだと思っています。

\*3 「自分の軸を持った進路選択」の達成を支援するための、ベネッセの進路学習教材。生徒それぞれが大切にしている意識や行動についての診断結果を基に、大学などの情報を提供する無料プログラム。「進路達成プログラム」の詳細は、ベネッセハイスクールオンラインで紹介。ログインにはIDとPWが必要。  
[https://bhso.benesse.ne.jp/hs\\_online/info/shinro-pgm/index.html](https://bhso.benesse.ne.jp/hs_online/info/shinro-pgm/index.html)

# 1年次から学校設定科目や対話で 関心を掘り起こし、表現力も育む

## 東京都・私立トキワ松学園中学校高校

自分の関心を突き詰め、自分の考えを表現する力を鍛える学校設定科目「思考と表現」を1年次に実施。関心の喚起につながる対話や、生徒を学校外と「結ぶ」ことを通じて、生徒の「マイ・ストーリー」づくりを支える。



### 探究学習を頑張った生徒ほど 年内入試を希望

中高一貫の女子校である東京都・私立トキワ松学園中学校高校は、2014年度から「探究女子」をキャッチフレーズに、自ら探究学習を進められる生徒の育成に力を入れている。同校では以前から、各教科の授業において、「自分の興味・関心を追究する」、「自ら調べて自分の考えを発表する」といった探究的な活動に取り組んできた。それをさらに充実させようと、16年度から中学1年次に、18年度から高校1年次に週1時間ずつ、学校設定科目「思考と表現」を設置。すべての学習の土台となる論理的思考力や表現力、調査スキルなどの指導を体系的に行っている。

加えて、日常的に教師が生徒に声をかけ、対話から素朴な疑問を引き出し、問いに結びつけるようにしたところ、生徒は課外活動で探究学習に熱心に取

り組むようになった。「稲わらを利用した新繊維の開発」「強振動と急激な水温変化が及ぼす金魚損傷の影響」といった研究や、子どもの国際交流の支援など、探究テーマは多岐にわたる。

探究学習の深まりに伴い、年内入試の希望者が増加。22年度の高校3年生の特進クラスでは、年内入試の受験者数がクラスの3分の2に上った。同クラスの担任を務めた進路指導部長の加藤美恵子先生は、次のように語る。

「探究学習で自分の疑問や好きなことを突き詰めていった結果、生徒は将来やりたいことを見だし、それがおのずと志望校選択に結びついていきました。そして、大学調べをする中で、志望校が年内入試を実施していることを知り、『自分の頑張りを生かして志望校に挑戦したい』、『探究学習の成果を大学に見てもらいたい』と、年内入試を希望する生徒が多く現れました」

加藤先生が前回高校3年生の担任を務めた7年前は、年内入試の受験者数はクラスの3分の1だった。年内入試を実施する大学数の増加の影響もあり、ここ数年、年内入試の受験者が増えていると、田村直宏校長は語る。

「大学が求める力と本校が培ってきた力が合致してきたことが、本校で年内入試の受験者が増えている要因の1



校長  
**田村直宏**  
たむら・なおひろ  
同校に赴任して3年目。



進路指導部長  
**加藤美恵子**  
かとう・みえこ  
同校に赴任して28年目。探究プロジェクト。国語科。



学力向上推進部  
**菅原孝宏**  
すがわら・たかひろ  
同校に赴任して13年目。探究プロジェクト。2学年担任。理科(物理)。



「思考と表現」担当、司書教諭  
**勝見浩代**  
かつみ・ひろよ  
同校に赴任して34年目。教務部。国語科。



「思考と表現」担当、司書教諭  
**小澤慶子**  
おさわ・けいこ  
同校に赴任して23年目。広報部。社会科。

つだと考えています。探究学習での学びと成果を基にした「マイ・ストーリー」を表現することで、一般選抜では合格が難しい大学に合格した生徒は何人もいます。探究学習と年内入試への挑戦が、生徒の未来を大きく拓いています」

# 年内入試支援

— 引き出し、共に創る「マイ・ストーリー」

実践 1

## 高校1年次 学校設定科目 「思考と表現」

### 関心を広げ、深めながら 表現力を鍛える

高校1年次の「思考と表現」では、講読や文章表現、調査、論文作成、発表などのスキルを、実践課題を通じて学んでいく(図1)。例えば、1学期の後半に取り組む読書感想文では、ワークシート、下書き、清書と、1冊で3回のアウトプットを行う(図2)。授業を担当する司書教諭の勝見浩代先生と小澤慶子先生がその都度、誤字・脱字や表現の誤用などを添削。生徒の考えが伝わる文章になっていなければ、それも率直に指摘し、生徒が本当に伝えたいことを追究させている。

「本選びから主題に対する自分の考えに至るまで、生徒は自分の関心を突き詰めていきます。そうした過程を本科目で繰り返し経験することが、将来の目標や自分の軸を見いだすきっかけになっています」(小澤先生)

1年次の夏季休業時には、希望進路に関する新書を読み、レポートを書く進路学習の課題に取り組む。新書選びに迷う生徒には、司書教諭が伴走する。

「何に関心があるの?」「建築です」「造る方? 見る方?」などと生徒とやり取りしながら生徒の関心を探り、それに合いそうな本を数冊挙げます。そして、目次と最初の数ページを読んでもみて、1冊読み通せそうな本を選ぶよう助言し、最終的には生徒自身に読む本を選ばせています」(勝見先生)

図書室は、各教科の探究的な活動で使う資料のよりどころにもなっている。同科目を通じて生徒の志向を把握している勝見先生と小澤先生は、生徒からの相談に、「前にこう書いていたよね。この本が探究につながるかも」と、生徒の関心に応じた助言をしている。

そのように、自分の関心に基づいて講読を重ね、レポートなどを書くことで、希望進路の分野で使われる用語が身につく。自分の考えを適切な語彙を用いて表現できるようになる。

「生徒は本科目の課題の添削を通じて、自分と他者の考えを混同しないことや、事実を要約してから自分の考えを書くことなどを習得します。3年次の志望理由書や小論文の作成時に、その成果が発揮されます」(加藤先生)

#### 図2 読書感想文作成の指導概要

##### 〈作成の進め方〉

- 1 **本選び** 司書教諭が用意した課題図書50タイトル以上の中から、生徒自身で読む本を選ぶ。
- 2 **ワークシート** 印象に残った場面(感動、共感、反感、疑問など)とその理由、主題と主題に対する自分の考えなどを書く。同シートが感想文の土台となる。
- 3 **下書き** 司書教諭によるワークシートの添削結果も踏まえて、「本の内容」「主題と自分の意見」「まとめ(自分はどうしたいか)」の3パートに分けて書く。

小澤先生「生徒は、何事に対しても『すごい』を使いがちで、自分の意見を他者に伝えるように表現するのが苦手です。添削では、例えば『すごい』をどういった意味で使っているのかなどを問いかけてます」

- 4 **清書** 下書きの添削結果を踏まえて、800字以内で仕上げる。

##### 〈学習評価〉

- 2~4では、生徒はルーブリックを用いて自己評価を行う。教師も添削後に同じルーブリックを用いて評価をつけ、生徒に返却する。

勝見先生「形成的評価として、自分の力を認識できるようにしています。生徒には、『CならB、BならAと、1つでもよいから上を目指そう』と声をかけています」

##### ●読書感想文のルーブリック(抜粋)

		A	B
文章	文章	主語・述語の不一致、文意が通らない文章がない	主語・述語の不一致、文意が通らない文章がある
	論理的な文章表現	論旨が一貫している(矛盾がない)	論旨が一貫していないところがある(矛盾がある)

※学校資料を基に編集部で作成。

#### 図1 高校1年次「思考と表現」の主な学習内容

読書感想文	主題を意識してテキストを読む方法を学ぶ。読書感想文に書くべき内容と、その順序を考えることを通じて、論理的な文章展開について学ぶ。
進路を考える本	夏季休業中の進路学習の課題に向け、進路に関する新書を選ぶ。
ブックレポート	著者の考えを読み取り、自分の主張を確立した上でブックレポートを作成する。
SDGs探究レポート	各自でSDGsに関するテーマを設定し、調べ学習を行う。根拠のある資料を基に結論を導き出し、レポートにまとめる(レポートの書き方の基礎を学ぶ)。グループディスカッションを通じて、個別の課題についての理解を深める。

ほかに、事典や新聞の縮刷版の使い方、インターネット検索の留意点などに関するスタディスキルを学び、その実践として、新聞の社説の要約を行う。定期考査はなく、提出物と授業に取り組む態度などで評価する。  
※学校資料を基に編集部で作成。

#### 注目

#### 動いている図書室

同校の図書室は、年間約1,500冊を購入。廃棄できない書籍かどうかを慎重に検討し、蔵書を入れ替えている。全教師が担当教科の購入候補の書籍を検討し、購入の可否を決めている。「探究学習でこのテーマに取り組んでいる生徒がいる」「授業で使う」など、生徒の学びに合った書籍をそろえることを心がけている。

実践 2

生徒の活動と進路を対話で結ぶ

教師が連携して生徒を把握し、対話につなげる

同校の生徒と教師の距離は近く、普段からよく話をする。その際に教師は生徒の関心を把握し、探究学習や志望校選択のきっかけとなる材料を提供する。また、図書室に保管されている「思考と表現」での成果物を見たり、生徒個々の貸し出し履歴から各教科や探究学習で活用した書籍を確認したりして、話の糸口を探ると、学力向上推進部の菅原孝宏先生は語る。

「担任は、各教科担当の教師との対話を通じてそれぞれの授業で生徒が示した関心を捉えて、どのような言葉を生徒にかければよいかを考えます。生徒の『マイ・ストーリー』づくりを中心に寄り添うのは担任ですが、担任が必要とする情報は、学校全体で連携を取って共有しています」

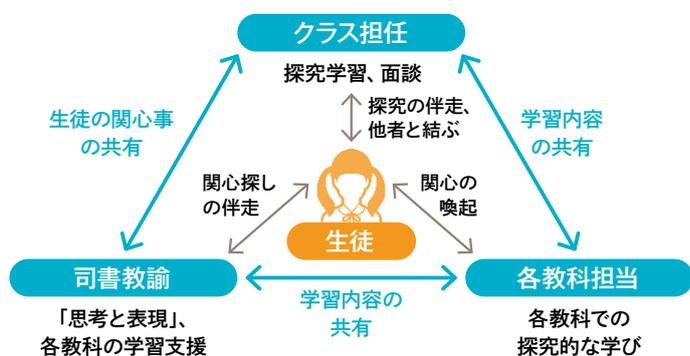
また、生徒との対話の前段階として、

信頼関係の構築も重視している。

「学問の本質を伝える授業をすることに加えて、面談ではじっくり生徒の話を聞きます。学校行事などで生徒の多様な面を捉えて褒めることも大切にしています」(菅原先生)

生徒を他者や社会と結び、志望校選択につなげることに力を入れていく。看護学部志望だったある生徒は、救急医療や高齢者看護など、大学ごとに特色があることを知り、志望校選択に悩んでいた。その生徒が子ども食堂

図3 「マイ・ストーリー」づくりの支援体制



※取材を基に編集部で作成。

展望

社会人の支援も得ながら探究学習を深化。教科指導も強化し、志望校の幅を広げたい

課外活動が中心だった探究学習は、22年度から、「総合的な探究の時間」で行っている。高校1年次は週2時間で、連携先の6つの企業の研究や、企業から出された課題に取り組み。高校2年次は週3時間で、人文科学・社会科学・自然科学・美術デザインの4つのゼミに分かれて探究学習を行う。専門的なテーマでは、外部の社会人の支援も得て、探究を深めていく。さらに、教科指導を強化して教科学力をより一層向上させ、国公立大学の総合型選抜・学校推薦型選抜の受験につなげたいと考えている。

「年内入試の受験者数の増加は喜ばしいことですが、一方で、丁寧な添削指導は時間を要するため、指導体制の構築も必要です。学校全体で支援する体制や方法を模索していきます」(田村校長)

の活動に取り組んでいたことから、田村校長が小児がんの子どもの支援ボランティアを紹介。生徒は、最終的に小児医療に力を入れる大学を選んだ。

「探究テーマが志望校選択に直結する生徒もいますが、多くの活動をしていても、自分の関心の軸を見いだせない生徒もいます。そうした生徒に必要なのは、他者の存在です。コンクールに出場して評価を受けたり、大学教員や地域の人など、学校外の人と話したりする中で、自分はこれからどうしたいのかを生徒はおのずと考えます。自分の内面を見つめ、自己との対

話を深めていく先に、自分が将来やりたいことが見えてくるのだと思います」(加藤先生)

3年次の志望校を絞り込む過程では、担任は入試日程を考慮しながら生徒個々に声をかけ、年内入試の準備を始める。

「その頃には『マイ・ストーリー』の軸はできているので、後はそれをいかに表現するかが重要になります。『思考と表現』で改善のためには添削が必要なことだと理解しているため、生徒はくじけず、何度でも志望理由書を書き直してきます」(加藤先生)

# 「桜が丘6マインド」を軸に、生徒のよさや成長を教師が語る

## 広島県・私立広島桜が丘高校

広島県・私立広島桜が丘高校では、生徒の非認知能力「桜が丘6マインド」を見取り、自己肯定感の醸成を図ることで、年内入試への挑戦を支援している。



「自分にもできる」と  
気づき始めた生徒たち

広島県・私立広島桜が丘高校は、2023年度から「スーパー進路多様校」を標榜し、生徒一人ひとりの希望進路をかなえる学校づくりに取り組んでいる。その中で教師たちが目指すのが、スクールポリシー「**「自考自創」**の実現だと、桐原琢副校長は語る。

「すべての生徒が自ら考え、自らを創ることで、それぞれの希望進路へ踏み出す学校を目指しています。ただし、『自考自創しましょう』という言葉が教師が繰り返すだけでは、そうした生徒は育ちません。そこで、自考自創のために必要な資質・能力を『桜が丘6マインド』として明確にした上で（図1）、その育成のために必要な教育活動を整理しました」

同校には、中学校で勉強に苦手意識を持った生徒が少なからずいる。これ

図1 スクールポリシー「自考自創」を実現するために必要な資質・能力「桜が丘6マインド」

自信 (じ)	自分を信じ勇気を持って挑戦するマインド
向上 (こ)	成長したいと願い自ら行動するマインド
探究 (う)	興味関心を深く突き詰めるマインド
受容 (じ)	他者を理解し受け入れるマインド
疎通 (そ)	積極的にコミュニケーションを図るマインド
協調・協働 (う)	仲間と共に (のために) 事を成すマインド

※学校資料を基に編集部で作成。

までは、そうした生徒は「自分に進学は無理だ」と早々に進路の選択肢を狭めてしまう傾向にあった。教師も生徒のそのような考えを仕方のないものとして受け入れていた。しかし15年度大入試において、当時3学年担任を務めた沖村将彦先生のクラスから、年内入試で同校初の国公立大学現役合格者が3人出たことで、「自分も高い目標を実現したい」という機運が後輩の生徒たちの中で高まったという。

「自分には進学は無理」という生徒



1 学年主任  
おきむら・まさひこ  
同校に赴任して18年目。進路指導部。地理歴史・公民科。



副校長  
きりはら・たくま  
同校に赴任して1年目。

の考えを変えたいと思いました。年内入試では、志望理田書などで、高校生活を通じて自分が何者になったのか、大学で何を学び、社会で何をしたいのかが問われます。生徒には、将来やりたいことを進学後に始めるのではなく、小さなことでもよいから今始めようという声をかけ、学校行事や生徒会活動などに積極的に取り組むことを勧めました」

未来と今をつなげて「マイ・ストーリー」をつくった生徒が年内入試で成果を上げたことで、数値化しにくい非認知能力にも目を向けて生徒の日々の成長を認め、自己肯定感を育むことの重要性が校内に浸透した。それが23年度からの「自考自創」及び「桜が丘6マインド」の周知と、その育成のために必要な教育活動の推進力となっている。

「自分を語る力」を  
生徒に育む

生徒のメタ認知を促す  
授業改善を推進

同校が掲げる「スーパー進路多様校」とは、生徒の多様な志望を100%実現する学校のことを意味する。そうした学校になるためには、生徒には志望を語る力が、教師には生徒の志望を引き出す力が必要だと、桐原副校長は語る。それは「マイ・ストーリー」が、生徒と教師双方の力でつくり上げていくものであるという考えからだ。

「進路についての答えを持っているのは、教師ではなく生徒です。高校入學段階では自分に自信が持てない生徒も少なからずいますが、そうした生徒にも、『こんな進路を歩きたい。そのためには、今をこのように生きたい』と、自分の今とこれからを結びつけて語れる力を育まなければなりません」生徒に自分を語る力を育むためにはメタ認知が必要だと考える桐原副校長

は、23年度からの学校改革の一環として、自考自創を実現するために必要な桜が丘6マインドの観点で、生徒が授業や単元ごとに自分を振り返るワークシート(図2)を導入した。

「様々な資質・能力の観点で自分を多角的に振り返れるように、授業も教師による説明一辺倒ではなく、生徒が個人で頑張る時間、グループで考える時間など、多様な活動を盛り込むよう、先生方をお願いしています。そして、『あなたの発言は、自分とは違う立場の人のことを理解しようとしたものだね』などと、6マインドを意識して生徒を見取ること、生徒が授業を通じて自分のよさや価値観を認識することができるようになっています」

授業改善が進むことで生徒のメタ認知は確実に促されると、沖村先生も実感している。

「中学校までの経験から『自分は勉強ができない』と思い込んでいる生徒は、非認知能力の視点で自分を振り返ることで、『自分は教科書の内容を覚えるのが苦手なだけで、物事の本質を深く考えることは嫌いではなかった』と自分を捉え直します。学びの楽しさと、学びを通じた自身の変容に気づいた生徒は、向学心が芽生え、やがて進学を選択肢に入れるようになります」

図2 自考自創を実現するために必要な桜が丘6マインドの観点で自分を振り返るワークシート

教科 地理 単元名 歴史総合 ふりかえりシート /年 2組 総合評価 問1 問2 問3 問4 問5				
<b>問1</b> 日々のふりかえりシートを見直し、各非認知能力を設定した回数を記入しなさい。また特にどのような場面で意識し、どのような行動を取ることができたか具体的に記述しなさい。 自信 向上 探索 受容 疎通 協調 下 9 7-7月に取り組む時、教科書を見て理解が利かずに悩んで、自分自身に問いかけ、周りに自分から教えることができた。非認知能力の受容を意識して、協調ができて、何片取りの良さは、協力しあえばパワーアップ課題でもやりやすくなった。単元テストも良い点が取れた。				
評価の観点 A 非認知能力の回数が記入されていて、場面と行動も具体的に記述できている。 B 非認知能力の回数が記入されているが、場面と行動が具体的に記述できていない。 C 非認知能力の回数が記入されているが、場面と行動が記述できていない。 D 非認知能力の回数が記入されていない。				
<b>問2</b> 単元を通して、あなたの学ぶ姿勢はどうだったか、客観的に振り返り、良かった点と改善すべき点を具体的に記述しなさい。 中学の頃の復習は授業を聞いていた。自分自身の時代に生かすことや、この動機をどう考えるか、どう考え方が生かすか、理解を深めたいという思いを、発表もした。				
評価の観点 A 良かった点、改善すべき点が、具体的に記述できている。 B 良かった点、改善すべき点が、記述できているが具体的なでない。 C 良かった点、改善すべき点が、記述できている。 D 良かった点、改善すべき点が、記述できていない。				
<b>問3</b> 単元を通して、あなた自身が自分の意志や判断によって主体的に取り組むことができたことを具体的に記述しなさい。 色々な苦手を歴史の先生から分かった。テストや発表を見せると理解が利かずに悩んで、自分自身に問いかけ、周りに自分から教えることができた。非認知能力の受容を意識して、協調ができて、何片取りの良さは、協力しあえばパワーアップ課題でもやりやすくなった。単元テストも良い点が取れた。				
評価の観点 A 自分の意志や判断が明確で、内容も具体的に記述できている。 B 自分の意志や判断が明確だが、内容が具体的に記述できていない。 C 自分の意志や判断が明確でない。				
<b>問4</b> なぜあなたは問3のように取り組むことができたのですか？あなたのあなたと比べながらその理由を記述しなさい。 成績のために頑張っていたけれど、歴史の先生から分かった。テストや発表を見せると理解が利かずに悩んで、自分自身に問いかけ、周りに自分から教えることができた。非認知能力の受容を意識して、協調ができて、何片取りの良さは、協力しあえばパワーアップ課題でもやりやすくなった。単元テストも良い点が取れた。				
評価の観点 A 以前と比べて何が、なぜ変わったのかを明確に記述できている。 B 以前と比べてはいるが、何が、なぜ変わったのかを明確に記述できている。 C 何が変わったのかは記述できているが、なぜ変わったのかは記述できていない。 D 何が変わったのかも記述できていない。				
<b>問5</b> 単元を通して、新たに気づいた自身の課題について具体的に記述し、さらに成長するために目指していく6マインドを答えなさい。また、どのような行動をずく具体的に書きなさい。 受容を意識して、自分自身に問いかけ、周りに自分から教えることができた。非認知能力の受容を意識して、協調ができて、何片取りの良さは、協力しあえばパワーアップ課題でもやりやすくなった。単元テストも良い点が取れた。				
評価の観点 A 自身の課題・行動・6マインドを意識し、先を見通して具体的に記述できている。 B 自身の課題・行動・6マインドについて、具体的に記述できている。 C 自身の課題・行動・6マインドについて記述してあるが、具体的なでない。 D 自身の課題・行動・6マインドに關しても、記述できていない。				

「何が分かったか・分からなかったか」だけでなく、「自分はどのように学んだか・それはなぜか」を生徒が振り返る。「1人で学ぶのか、ほかの人と話し合うのかを自分で考え、自己決定するような授業を行うことで、生徒が自分らしい学び方、生き方はどのようなものかをメタ認知できるようにします」(桐原副校長)

生徒が「桜が丘6マインド」の観点で自分を振り返っている箇所

※学校資料をそのまま掲載。

図3 教師のための生徒のエピソード記録シート

期間：2023年1月30日～2月5日				
No.	力	誰が？	どんな 場面で？	どうした？
①	<input checked="" type="checkbox"/> 自信 <input checked="" type="checkbox"/> 向上 <input type="checkbox"/> 探究 <input type="checkbox"/> 受容 <input type="checkbox"/> 疎通 <input checked="" type="checkbox"/> 協調	1年生 A (バドミントン部)	2/4 (土) 広島県 学年別大会 (バドミントン)	前大会は緊張に飲み込まれ1回戦負けだったが、顧問の「大きな声を出せば気持ちも大きくなる」という助言を実践し、自信を持って試合に臨み、ベスト8 (5位) に入った。
②	<input checked="" type="checkbox"/> 自信 <input checked="" type="checkbox"/> 向上 <input checked="" type="checkbox"/> 探究 <input type="checkbox"/> 受容 <input type="checkbox"/> 疎通 <input type="checkbox"/> 協調	3年生 G	1/30 (月) 卒業試験	高3になるまで満点を取ることがなかったが、2学期に日本史Bの試験で初めて満点を取ることができ、その後も継続した努力と徹底した準備をすることで、卒業試験において学年で唯一の満点を取った。
③	<input checked="" type="checkbox"/> 自信 <input checked="" type="checkbox"/> 向上 <input checked="" type="checkbox"/> 探究 <input type="checkbox"/> 受容 <input type="checkbox"/> 疎通 <input type="checkbox"/> 協調	3年生 J	1/30 (月) 卒業試験	年度当初は目立たない存在で、クラスの上位ではあるものの、トップを取ることはなかったが、今までで一番クラス平均点が低かった卒業試験においてクラストップと唯一の平均90点以上を達成した。

実際の記録シートは2ページで、10個のエピソードを記入できるようになっている。「10個のエピソードをどれぐらいの時間で記入できるかを試してみることで、自分が日々生徒をどれくらい見取ることができているのかを確認することができます」(桐原副校長)  
 ※学校資料を基に編集部で作成。

実践 2

「生徒を語る力」  
を  
教師に育む

生徒を見取る力を問う  
教師のための記録シート

教師が生徒の志望を引き出したり、生徒の現状と課題を整理したりして、「マイ・ストーリー」づくりを支援す

「あなたはこのように語ると、教師が生徒のよいところを語ることは、生徒の自己肯定感を育むだけでなく、自己理解も促します。その生徒のよさ、適した進路を見抜く力が教師には求められます」(沖村先生)

23年度から導入された「生徒のエピソード記録シート」は、自考自創を実現するために必要な校が丘6マインドを手がかりにして、実際にどの生徒が、どんな場面で、どんな行動をしたのかというエピソードを記録するための

ツールである(図3)。

「本シートを記入する時に、生徒の姿をすべに思い出し、具体的な様子を語れるかどうかで、教師が日常的にどのくらい生徒を見取ることができているかをセルフチェックできます。また、記入した内容を教師間でシェアすることで、生徒の見取りを豊かにすることができます」(桐原副校長)

自己肯定感が十分に高まっていない生徒は、「マイ・ストーリー」を他者に語ることを恐れがちだと、沖村先生は言う。だからこそ、どんな夢を語っても笑われることなく、深く生徒を理

解した教師から「あなたはきっと大丈夫だよ」と励ましてもらえるような心理的安全性に満ちた教室をつくりたいと考えている。

「一人ひとりの生徒が必ず持っているそれぞれのよさを教師が把握し、語ることができるようになれば、生徒は堂々と『マイ・ストーリー』を話し始めます。今後、6マインドを手がかりに生徒をしっかりと見取っていくことで、自分を語ることが必要になる年内入試に、生徒が果敢に挑戦できるよう、支援体制を整えていきたいと思えます」(沖村先生)

展望

週5コマの探究学習など、  
生徒が自身の成長を自覚する場を拡充

同校では23年度から「総合的な探究の時間」を週5コマに拡充。1年次では「楽しさ」とは何か?」をメインテーマに、e-Sports大会の開催など、プロジェクト型の探究学習を通じて身近な興味・関心の価値に気づかせるとともに、自己有用感を取り戻させることもねらいとしている。2年次以降は、地元・広島県の課題に向き合い、理想の姿を考えさせる予定だ。「探究学習は年内入試で合格するための最大の武器の1つであるという共通認識の下、全教師が探究学習にかかわる体制を整備しました」(桐原副校長)

同校は、進学したいという気持ちを言い出せないまま生徒を卒業させないためにも、生徒が非認知能力の向上を果たせるような場を充実させ、そこでの成長をメタ認知できるように仕組みを構築する考えだ。

# 探究の学びを軸に、UTO-LOGICを駆使して「問い」を創る力を養う

## 熊本県立宇土中学校・宇土高校

SSH3 期目を迎え、全校体制でサイエンス人財の育成を図る熊本県立宇土中学校・宇土高校。探究の学びを軸に、生徒の主体性を引き出し、人生 100 年時代のキャリアをデザインさせる実践を紹介する。



### 探究の学びで育んだ 資質・能力で進路を拓く

2023年度にスーパーサイエンスハイスクール（SSH）3期目を迎えた熊本県立宇土中学校・宇土高校。かつて3年生の1割程度であった年内入試出願者数は、近年は半数に迫る。さらに、18年に同校から、世界の最難関大学の1つとされる米国・ミネルバ大学に合格者が九州で初めて出て以来海外大学合格者が途切れることはない。

SSHの高度な科学研究への取り組みは、生徒の進路の選択肢を広げているが、多彩な進路を実現する要因はほかにもある。それは、全教科で探究の「問い」を創る授業に挑戦していることだと、横川修校長は語る。

「探究とは、日常の気づき、自然の不思議、社会の問題などについて、生徒が問いを立て、その解明や解決のために協働して知恵を出し、行動し、試



写真 後藤先生が生徒と一緒に描いたマインドマップ。探究学習での様々な気づきや出会いを振り返る中で、「これがやりたかったんだ！」と気づく生徒は少なくない。

行錯誤することであり、世界を自分事にする営みです。本校では、授業の中で生徒が探究の『問い』を創り、学びを自分事に行っています。そうして、日々の授業でも新たな興味・関心を見つけ、学校内外の探究の学びで育んだ資質・能力を生かし、年内入試挑戦や海外大学進学など、各々がキャリアをデザインし、進路実現を果たしています」

生徒は、「問い」を創る力を生かして、進路選択のキーとなる出来事や、これ

までの活動を通じた自らの成長をマインドマップ（写真）などを使って整理し、「マイ・ストーリー」を語れるようになっていくと、探究部長で進路指導主事の後藤裕市先生は語る。

「探究学習のプロセスや日々の授業での気づき、学びなどを振り返ることで自分の軸を見つけ、高校卒業後の人生で向き合う『問い』を生徒が見つけられるように支援することが、私たちの進路指導です」



校長  
横川修  
よこがわ・おさむ  
同校に赴任して2年目。



探究部長・進路指導主事・指導教諭  
後藤裕市  
ごとう・ゆういち  
同校に赴任して12年目。理科（生物）。



教務主任・指導教諭  
奥田和秀  
おくた・かずひで  
同校に赴任して12年目。地理歴史・公民科（日本史）。



探究部企画班長・指導教諭  
梶尾滝宏  
かじお・たきひろ  
同校に赴任して18年目。理科（物理）。

# 年内入試支援

— 引き出し、共に創る「マイ・ストーリー」 —

実践 1

## 全教科での探究の「問い」を創る授業

### 「問い」を立てる力が キャリアを描く力になる

同校では、全教科で探究の「問い」を創る授業に取り組んでいる。教務主任の奥田和秀先生は、日頃から「問い」の視点を持って授業に臨むことで、生徒に「主体的に学習に取り組む態度」が醸成され、ひいてはキャリアを描く土壌が育まれると語る。

「例えば日本史の授業で、『旧石器時代の日本人』という授業タイトルを『日本人はどこから来たのか?』と、問いの形に変えるだけで、生徒の学びへの姿勢は変わります。そのような『問い』を単元の冒頭だけでなく、1コマの授業の中で教師と生徒双方が立てていきます」

探究の「問い」を創る授業は、反転学習を取り入れ、「問い」を鍵にした3つの活動で構成される(図1)。「問い」をつかむ」では、教師が提示した「問

い」に引き合い、知識を整理する。「問い」に挑む」では、論文などに基づいた「問い」を教師が提示し、話し合いなどを通じて思考力などを磨く。「問い」を創る」では、それまでの学びを踏まえて生徒が新たな「問い」を創る。

「授業の最後の『問い』創りは、本校のSSHで育成を目指す資質・能力『LOGIC』(図2)のいずれかを切り口にして取り組みます。毎日の問い創りを見守る中で、私たち教師は『いつもは論理性を重視した問いなので、今日は創造性を重視した問いを創ってみよう』などと、生徒に声をかけています」(後藤先生)

生徒は、「問い」創りなどの度に接するルーブリックやチェックリスト(図2)によって、「LOGIC」を常に意識する。また教師は、「問い」創りを通じて「LOGIC」の育成を図る授業を行うために、それぞれの教師の理想、生徒に育みたい資質・能力を整理し、実践を共有する教員研修を例年4月に実施している(図3)。

日々の授業で何を知り、何が分かったのか。次は何を探究したいのか。そうして学びを振り返り、次の課題の設定につながる過程を日々の授業で体験することも、生徒の「マイ・ストーリー」を語る力につながっている。

図3 資質・能力「LOGIC」を育む授業を行うための教員研修プログラム

時間	内容	取り組み・ICT活用
0	チェックイン グランドルール確認・共有	<input type="checkbox"/> 座席確認(教科ごと) <input type="checkbox"/> chromebook
5	ワーク1 理想の授業をイメージする ①【教師目線】○○ができる、○○が身につく授業 (5分) ②【生徒目線】□□ができる、□□が身につく授業 (5分) * 教室空間・生徒の実態・個々のスキルを超えた自由な発想	① スプレッドシートA列から1セルに1コメント入力
15	ワーク2 理想の自学をイメージする ①【教師目線】○○ができる、○○が身につく自学 (3分) ②【生徒目線】□□ができる、□□が身につく自学 (2分) * 授業内でできないこと、自学での取り組みが望ましいこと	② スプレッドシートB列から1セルに1コメント入力 ③ A列は青色、B列は黄色の付せんとして Miro に添付
20	ワーク3 理想の授業設計をイメージする ① 授業でした方がよいこと、自学でした方がよいことを整理 ② 授業でしていたが自学でする方が理想的、その逆も可視化	④ フレームに付せんを移動する

※学校資料を基に編集部で作成。

図1 探究の問いを創る授業の流れ



※学校資料を基に編集部で作成。

図2 育成を目指す資質・能力「LOGIC」とチェックリスト



#### ● チェックリスト (Objectivity)

Objectivity (客観性)	
情報の正確性 参考文献の出典を明らかにしたレポートができる	
参考にした図書、文献、新聞記事、ウェブサイトなど、資料の名称を正しく記載できている。(「著書名」「タイトル」「出版年」「ページまたはURL) )	<input type="checkbox"/>
信頼度の高い資料(著書、出典、公的ウェブサイト等)から参考文献を活用してレポートを構成することができている。	<input type="checkbox"/>
レポートのどの部分に参考文献を活用しているか、参考文献のどの内容をレポートに活用しているか、レポートを作成する上で表記することができている。	<input type="checkbox"/>

※学校資料を基に編集部で作成。

探究学習の諸活動の充実

探究学習の中で  
年入試に必要な力を育む

23年度、同校は進路行事と探究学習の連携を強化するため、分掌改編を実施し、進路指導部を探究部の中に置いた。探究学習の充実と進路を切り拓く力の育成は、密接な関係にあると考えたからだ。科学部顧問として同校の探究学習をリードする梶尾滝宏先生は、「探究学習の活動には、年入試対策に通じるものは多い」と説明する。「本校の生徒は、探究学習を通して年3、4回の発表を経験します。漫然と原稿を読み上げるのではなく、自分が経験した探究学習の素晴らしさを熱く相手に伝えることができれば、ポスターセッションやプレゼンテーションも、年入試での面接やディスカッションなどの練習になります。探究学習を充実させれば、年入試出願時の指導の負担は明らかに軽減します」

探究学習での成長を語る  
先輩の姿が進路観を刺激

探究学習の発表において、「テーマについて何が分かったか」だけではなく、「探究学習を通して自分はどういう資質・能力を獲得したのか」「学校の学びにどのように取り組めば資質・能力が獲得できるのか」を生徒にしっかりと語らせているのは、特に下級生に探究学習を通じたキャリア形成をイメージさせるためだ。

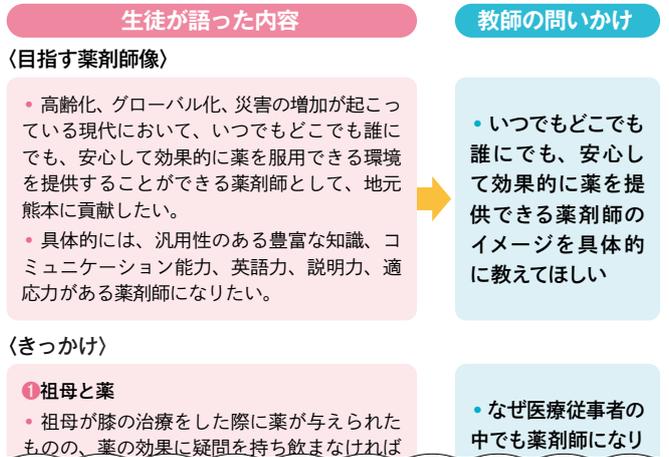
「文系志望だった生徒が、探究学習を通じて理系の世界に興味を持ち、科学者を目指して海外大学に進学する。そんなロールモデルに出会うと、どの生徒も『自分も大きく変わりたい』と思うようになります。学校での学びをどのように進路につなげるかを考える上で、生徒にとって先輩の体験談が何より参考になります」(梶尾先生)

日々の授業での「問い」創りや探究学習を通じて、「自分は何を獲得したのか」「次は何を獲得したいか」をメタ認知する同校の生徒たち。未来を生きる上で必要な資質・能力を育むための教科指導・進路指導の改革を通じて、生徒は着実に「マイ・ストーリー」を描く力を身につけている。

図4 志望理由書の作成過程をデータベースとして保存

- 生徒 A の学習活動の主な内容
  - 1年 ロジックリサーチ「日本 VS 感染症～社会から学ぶ感染症対策～」
  - 1年 プレ課題研究「ストレスマーカーを用いたプラセボ効果の検証」
  - 2年 3年 SS 課題研究「ストレス減少の観点から見たプラセボ効果の証明と応用」
- 生徒 A の主な活動歴
  - 1年3月 ロジックスーパープレゼンテーション・プレ課題研究代表発表
  - 2年7月 構想発表会
  - 2年11月 中間発表会「熊本大学連携・大学職員、本校卒業生を交えたポスターセッション」

● 生徒 A の志望理由書の作成過程



※学校資料を基に編集部で作成。

展望

すべての教師の力、経験を結集し、  
生徒の「マイ・ストーリー」づくりを支援

年入試出願者の中には、探究学習での学びと、そこでの成長をつまぐ整理できていない生徒ももちろんいる。そうした生徒を支援するために、同校は23年度より、志望理由書の作成段階から3学年団の教師だけでなく、その生徒の過去の探究学習を伴走した教師もかかわるようにした。

また、年入試に出願する生徒と教師のやり取りをテキスト化し、指導のデータベースとして蓄積するようにした(図4)。活動歴だけでなく、「マイ・ストーリー」をつくる「問い」として、教師がどんな言葉を生徒にかけてのかを記録することで、支援のノウハウの共有化を進めている。

## 自己理解を促すかわり方を考える

教師の共感的なかわりの中で、  
生徒は自身の思いを再構築する

富山大学保健管理センター 客員准教授 西村優紀美

「マイ・ストーリー」を生徒自身が語れるようになるためには、教師の日々のかかわりが重要になる。では、どのようなことに留意して、生徒とかかわればよいのか。「共感的な対話」をキーに専門家が語った。

1  
日常の  
接し方

「西村客員准教授からの提言」よりよい生き方・進路を自分で選択するためには、過去の経験を踏まえて、自分の考え方や得意・不得意に向き合う自己理解が欠かせませんが、自分に対して肯定的でなければ、自分を理解しようという気持ちにはなりません。そこで、生徒の自尊心を高めるための有効な手法の1つである「共感的な対話」について紹介します。進路を考える生徒の支援にきつと役に立つと思います。

教師を「対話の対象」と  
生徒に認識させる

生徒が自尊心を育み、自己理解を深めていくための対話においては、自分の思いや考えを他者に共有する中



富山大学  
保健管理センター  
客員准教授  
西村優紀美  
にしむら・ゆきみ

専門は発達障害児・者に対する「コミュニケーション支援」。一般社団法人全国高等教育障害学生支援協議会理事などを歴任。現在は、石川県立高校スクールカウンセラー、石川県生徒指導・発達障害サポートチーム委員などを務める。

で、「自分のことを分かってもらえた」「そう思ってたよんだ」といった気持ちになるよう、他者の共感が重要で、そうした生徒との共感的な対話が成り立つためには、まずは生徒に教師のことを「対話の対象」として認識してもらわなければなりません。だからこそ、教師は口頭から生徒に声をかけて、日々の出来事や生徒が考えていることを興味を持って聞き、共感する態度を見せる必要があります。

生徒にかける言葉は、「最近、何か元気そうだね!」「部活動の調子はどうなの?」「文化祭の準備は、ほかどつていいる?」など、何気ないひと言で構いません。それに対する生徒の返事を「そうなんだ」「それはいいね」などと肯定的な言葉で受け止め、生徒が話す内容に興味を持っていることを示します。

「へー、○○なんだ」などと生徒が言った内容を繰り返すことも、「ちゃんと聞いているよ」というメッセージになります。もちろん、「それ、詳しく

く教えて」などと、話を広げてもらいましょう。大切なのは、特定の生徒にだけでなく、いろいろな生徒に声をかけることです。誰にでも分け隔てなく声をかける教師の姿を見て、生徒は「この先生と話してみたい」と思うのです。

## 西村客員准教授が監修した対話のヒント集

## 『生徒の自己理解を促す共感的な対話』

神奈川県立総合教育センターが製作した冊子『生徒の自己理解を促す共感的な対話』では、学校生活の様々な場面において、教師が生徒と「共感的な対話」を実現できるように、具体的な対話のポイントを紹介している。

<https://www.pen-kanagawa.ed.jp/edu-ctr/sodan/leaflet.html>



### 教師ばかりが話す面談から 生徒自身が語る面談へ

「面談では、生徒の話を書くつもりだったのに、ふと気がつく、自分ばかりが一方的に話していることがよくある」など、面談の理想と現実に悩む教師は少なくない。西村客員准教授は、教師ばかりが話をしてしまう場合は、生徒の話を書くことよりも、教師が自分の考えを伝えることを優先していることが多いと説明する。教師の解釈を前面に出すと、生徒は教師に対して話すことを諦めてしまう。「生徒一人ひとりが、自分とは違う存在であるという前提に立って、生徒の言葉に耳を傾けることが大切です」(西村客員准教授)

- 「今のあなたはこうだ」「こうあるべきだ」などと、教師の解釈を生徒に押しつけていないか？  
→生徒自身に現状認識と今後どうしたいのかを語らせる
- ほかの生徒や教師自身の成功体験を一方向的に披露していないか？  
→生徒が「先輩はどうしていたのですか？」などと聞いてきた場合は答える

# 2

## 面談での 接し方

### 人生の物語の語り手である 生徒を尊重する

生徒が自分の興味・関心や将来の目標などを整理し、歩むべき進路を明確にしていくために、教師は面談で生徒にどのように接するとよいのでしょうか。

面談で生徒の話を書いていくとい「それなら○○をした方がよい」な

どと具体的な助言をしたくなるものです。しかし、性急に解決策を示すのではなく、生徒の考えや悩みに関心を持って耳を傾け、「あなたはどうしたい？」などと問いかけ、生徒自身に状況や思いを整理させることが大切です。生徒が稚拙な考えを語ったとしても、「あなたはそう思ったんだね」、「あなたが感じたことは分かったよ」といったように、生徒の思いや考えを受け止め、「じゃあ1週間後に、また先生に状況を教えてね」などと、一緒に考え続ける姿勢を示します。

面談に臨む教師にまず求められることは、生徒を人生の物語の語り手・創り手として尊重すること、そして今後どうしていきたいのか、生徒自身の考えを聞くことなのです。

面談に臨む教師にまず求められることは、生徒を人生の物語の語り手・創り手として尊重すること、そして今後どうしていきたいのか、生徒自身の考えを聞くことなのです。

### 言葉を引き出すことで、 生徒は自分を語る力を得る

とはいえ、生徒の話に「うんうん、そうなんだね」と聞くことだけが共感的な対話ではありません。生徒の話の中で気になったことや分からないことは質問してもよいですし、生徒から問われたら、先生自身の考えを伝えてもよいでしょう。その際は、生徒の考えを受け止めることが大切であり、否定してはいけません。そして、「この生徒は、なぜそう思ったのだろう」と、生徒に関心を持ってさらに話を聞きます。

面談の途中で内容を整理することも教師の大切な役割です。その際、「まとめると、こういうことだね」と決めるのではなく、「これまでのところを整理すると、先生はこう理解したのだけど、それでいいかな？」と、生徒に必ず質問するようにします。もし整理の仕方が違っている場合は、生徒は「ここが違います」と指摘することになり、生徒にとって自分の考えを再確認するチャンスとなります。

性急に答えを与えるのではなく、生徒の言葉を待ち、受け止め、引き出すことで、生徒は少しずつ自分を語る力を身につけていきます。



### 面談力を高める お勧めアクション

### 逐語録を共有し、 面談を振り返る

面談が上手な先生は必ずどの学校にもいます。面談のスキルを高めるには、そうした先生の、生徒との面談に同席するのが一番です。面談に同席させてもらうことが難しければ、面談でのやり取りを逐語録としてそのまま書き起こしてもらい、それを読んでみるとよいでしょう。同じように、自分の面談を逐語録で振り返ることもお勧めします。自分では傾聴・受容しているつもりだったのに、「○○しないと駄目だよ。そのためにはまず○○から始めて……」などと、自分が答えを提示している時間が多かったと気づくことも少なくないものです。ぜひ、取り組んでみてください。

### 専門家でもこんなことが……

共感的な対話は意外と難しいものです。私たち専門家でも、逐語録で面談を振り返ると、相手に対して「ここができていませんね」「こうすればよいのですが」といった言い方になっていることがあります。共感的な対話の学問的な意義も理解しているから大丈夫と思わないで、お互いに研鑽を積みたいですね。

## 年内入試支援

— 引き出し、共に創る「マイ・ストーリー」

3  
事例から  
考える「その夢は無理」ではなく、  
「なぜ、それが夢か」を聞く

自分の適性や学力などとギャップがある志望を語る生徒には、どのように接すればよいか考えてみましょう。

「このままのあなたでは無理だよ」などと否定してしまつと、その後、生徒は自分の考えを話さなくなつてしまつて恐れがあります。かと言って、「いいね、頑張つて！」と励ますだけではよいというものでもありません。

最初に耳を傾けるべきことは、生徒がそうした志望に至つた理由です。「人の命を救いたいから」など、生徒が語つた志望理由をまずは受け止めます。「命を救う」といった、進路を考へる上で大切にしたい思いを生徒と共有することで、志望変更することになつた場合も、「命を救う仕事は、ほかにもあるのではないか」などと、ほかの選択肢を生徒と探ることができるようになります。

越えるべき現実社会の  
壁を一緒に確認する

ただし、ほかの選択肢を探し始めるかどうかは、生徒が決断することです。教師が「別の道を探したら？」と志望の変更を勧めてしまつと、生徒にとつて、教師が進路の障壁となつてしまいます。現実として越えなければいけない壁の高さを生徒自身に自覚させ、決断をさせることが重要なのです。

そこで、志望をかなえるためには何をしなければならぬのかを生徒に調べさせ、一緒に確認していきまふ。生徒が壁を越えるための努力を始めるのであればそれを支援し、志望変更を検討したいと考えたのなら、進路を考へる上で大切にしたい思いを生徒と確認しながら、「あなたにふさわしい進路はきっと見つかるよ」と、生徒を応援します。

生徒から進路について調べたことを聞く際には、生徒と同じタイミングで気づきを得たように振る舞います。「先生が言った通り、難関の試験だったでしょう」ではなく、「そうか、そんなに難しい試験なんだね」といった言葉の方が、相手の自尊感情を損ねないというの、大人も同じなのではないでしょうか。

4  
対話を通した  
生徒の成長生徒自身が思いを  
再構築できるようになる

生徒との面談などで話題に上がるテーマは、簡単には答えが出ないものばかりです。生徒は端的な正解を求めがちですが、答えは1つではなく、解釈や選択肢が複数存在することを生徒に理解させることが大切です。そして、面談などで「こうしてみよう」と具体的に策が決まっても、よい意味での「とりあえず」の策であり、「うまくいかなかった時は、あなたが悪いわけではない。別の方法をまた一緒に考えよう」と、再考するチャンスがあることも伝えます。

そうしたかわり続けるうちに、生徒は「ここが疑問だったけれど、こういうふうになってみようと思えます」と、自分の考えを整理・再構築することができるようになります。教師との対話を通して、生徒は自分を語る力を確実に身につけていくのです。

次号から、大きく変化する大学入  
試環境で求められる「新進路選択」  
についての連載がスタート!

年内入試の募集枠の拡大など、大学入試環境が大きく変化する中で、これからの生徒の進路選択には、どのような支援が必要になるのか。10月号から、その考え方と実践事例を紹介するコーナーの連載をスタートさせます。ご期待ください!

## ▶ 年内入試の支援に役立つ! 記事のご紹介

『VIEW next』高校版では、教師が生徒理解を深めるための志望校検討会のあり方や、生徒の長所を伝える推薦書の事例、資質・能力の育成を意識したポートフォリオのフォーマットなど、年内入試に役立つ記事をこれまでご紹介してまいりました。それらの記事をまとめたページを、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』内につくりました。ぜひ、ご覧ください。

<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article16467/>

